

分離不安症とは

近年、人とペットたちの心の距離が密接になることによって多く見られる疾患となりました。わんちゃんに多いものとされていますが、最近では猫ちゃんでも見られるようです。

《症状》

留守番や、お家以外のところに預けるなど、家族と離れた時に過度の不安やストレスを感じてしまい、様々な問題行動を起こしてしまいます。

- トイレ以外の場所での排泄
- 破壊行動
- 鳴く、吠える
- 自傷行為
- 下痢、嘔吐などの消化器症状
- 食欲不振



《素因/潜在兆候》

お互いに依存しあっている関係性で発生することが多いです。

- お家で常に一緒にいる、くっついて歩く。
- 飼い主の姿が見えなくなると鳴く。
- 帰宅時に過剰に喜ぶ(喜びすぎておしっこをする)

他にはお留守番中に怖い思いをした経験によっても発症することがあります。(地震、花火など)

《治療》

◆ 内科治療

分離不安症の子は脳からのセロトニン分泌が少ないとされています。脳内セロトニンの作用を増強させるお薬で不安を減少させることが期待できます。

すぐに効果が表れるものではなく、1~3か月の継続治療が必要です。

また、抗不安作用のあるミルクプロテインのサプリメントもごさいます。

内科治療だけでは完全な改善が難しく、行動療法を同時に実施する必要があります。

◆ 行動療法

高すぎる依存心を軽減させるために、継続して家族全員が行う必要があります。

- ✓ 出かける30分~1時間前くらいから、あえて接しないようにして外出を悟られないようにする。
- ✓ 出来れば、短いお留守番から練習していく。
- ✓ 留守番中でも安心してもらえるよう、衣服など匂いのついたものを近くに置いておく。
- ✓ 帰宅時に喜んで出迎えられても、冷静になるまで声を掛けたり触れたりしない。
- ✓ 留守中に問題行動を起こしても叱らない。
- ✓ 在宅中に「構って!」と言われてもすぐに応じない。

若い時に平気でお留守番が出来た子も、高齢になって視力や聴力が低下することで不安になり、分離不安症を発症することもあります。